

# 質的データ分析法としての SCAT と うへの式質的分析法の比較

— 幼稚園長のインタビューデータから —

中坪史典・濱名 潔・淀澤真帆・加藤 望・田島美帆

(2019年10月3日受理)

A Comparison of SCAT and Ueno's Qualitative Analysis as the Qualitative Data Analysis:  
A Study of Interview Data from a Kindergarten Director

Fuminori Nakatsubo, Kiyoshi Hamana, Maho Yodozawa, Nozomi Kato and Miho Tajima

**Abstract:** The purpose of this study is to compare the characteristics of SCAT (Steps for Coding and Theorization) and Ueno's qualitative analysis as a form of qualitative data analysis applied to interview data from a kindergarten director. The subject and methods of the study are as follows. (1) We interviewed the director of Kindergarten A. (2) The research question asked why he started to run the child-based kindergarten. (3) We analyzed the interview data using SCAT. (4) We also analyzed the interview data using Ueno's qualitative analysis. (5) We compared their characteristics. The analyses made the following points clear. First, the SCAT is characterized by the decontextualisation of the segmented text, step by step. By contrast, Ueno's qualitative analysis is marked by its recontextualization through the mapping and charting of metadata. Second, when we use SCAT, we need to understand the theory of qualitative inquiry and must read the text over and over, analyzing it over time. However, the intellectual excitement when we discover the inherent meaning in the text is great. However, Ueno's qualitative analysis is superior in terms of cost performance, time saved, and energy savings, though it does not convert qualitative data into words. With this approach, the intellectual excitement we felt when we discovered the meaning inherent in a text was not as great as when using SCAT.

Key words: Qualitative Data Analysis, SCAT, Ueno's Qualitative Analysis, Interview Data

キーワード：質的データ分析, SCAT, うへの式質的分析法, インタビューデータ

## 1. 問題と目的

本研究の目的は、学生時代に保育・幼児教育を学ぶことのなかった幼稚園長のインタビューデータをもとに質的データ分析法である SCAT (Steps for Coding and Theorization) (大谷 2008, 2011, 2019), うへの式質的分析法 (上野・一宮・茶園 2017; 上野 2018) のそれぞれを用い、彼がなぜ、子ども主体の幼稚園を運営するに至ったのかというリサーチ・クエスション

を明らかにすることで、両手法の特徴を比較することである。

保育・幼児教育, 学校教育, 医療・看護, 福祉など人間が人間に働きかける営みを主とするヒューマンサービス職分野において質的研究が活発に展開される。その理由の一つとして、ある状況の中で人々が捉える現実や、その現実における相互作用の様子を人々の主観性を尊重しながら理解するという特性があると考えられる。文脈の影響を排除して因果関係を見るよ

りも、人間の営みの文脈を壊さないで人間を見ることを重視する質的研究は、複雑で複合的な営みの中で個別・具体的な現象を文脈の影響も踏まえて理解しようとする保育・幼児教育関係者の志向と親和性が高く(中坪 2017)、このことは学校教育、医療・看護、福祉などの分野においても同様であろう。

こうした中、観察やインタビューなどを通して収集した質的データの分析法や、データ収集の手続きまで規定した質的研究法においても、KJ法、グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Grounded Theory Approach)(以下GTAと表記)、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Modified Grounded Theory Approach)(以下M-GTAと表記)、複線径路・等至性モデリング(Trajectory Equifinality Modeling)(以下TEMと表記)など、特徴の異なる様々な手法が示されている。

他方、こうした様々な手法の提示は、初学者がリサーチ・クエスチョンに基づいて質的研究を行う際、どれを選択し、どう使い分けるのかの判断に困難が生じることが予想される。また、選択した手法に提示された手順に従うだけの研究に陥ったり(境・中西・中坪 2012)、研究方法論の意味や意義を理解しないまま形ややり方だけを真似たり(大谷 2019 p.44)など、ツールとしての使用が「諸刃の剣」(大谷 2019 pp.273-275)となることが危惧される。

このような問題意識のもと境・中西・中坪(2012)は、M-GTAとTEMを取り上げ、木登りへの子ども(A男、4歳児)の挑戦場面に注目し、彼の挑戦がどのように展開されるのかというリサーチ・クエスチョンのもとで収集された観察データをそれぞれの手法で分析し、子どもの経験の描かれ方について双方の特徴を比較する。その結果、M-GTAは、個々の事例における事実の変遷や対象者の変容の要素を総合したプロセスの全体構造を捉える特徴を有するのに対して、TEMは、実際の時間とともにある対象者の変容や事実の変遷のプロセスそのものを捉える特徴を有することを明らかにした。この研究は、子どもの経験を質的に描き出すことについてM-GTAとTEMの強みをそれぞれ示したものであり、初学者がどちらを用いて質的データを分析するのかを判断し、それぞれの意味や意義を理解するための足場かけに貢献する。

そこで本研究は、境・中西・中坪(2012)に依拠し、これとは異なる質的データ分析法を取り上げることで初学者がそれぞれの特徴を理解し、選択や判断に資する知見の提示を試みる。本研究が取り上げる質的データ分析法は、大谷尚氏が開発したSCATと、KJ法(川喜田 1967)の発展型として上野千鶴子氏が開発した

うえの式質的分析法である。

本研究がこれらを取り上げる理由は、次の3点である。第一に、いずれも分析手順が明示化されており、初学者の助けとなること。質的研究を志す多くの初学者は、観察やインタビューを通して収集した膨大な言語情報や文字記録を前に、何からどう分析したらよいのかと茫然自失に陥る。両手法は、そうした初学者ニーズを踏まえている。SCATは、ゼミに参加する大学院生が質的データ分析に困難なく取り組めるよう開発されたものであり(大谷 2019 p.275)、うえの式質的分析法は、立教大学セカンドステージカレッジを受講する生涯学習意欲の高い社会人を対象に行われたKJ法実習が起点になっている(上野 2018 p.221)。

第二に、いずれも日本の社会科学を熟知した日本人研究者が開発したものであること。自然現象の法則を見出す自然科学と異なり、社会科学の場合、ことばを媒介とする文化や社会について多様な次元で解釈を重ねる学問であることから、質的データ分析においても、ことばや社会や文化の解釈が重要となる。その際、筆者(中坪)の個人的経験によれば、例えば、GTAなど海外で開発された質的研究法(Glaser & Strauss 1967; 戈木クレイグヒル 2006)を用いて日本で収集した質的データを分析する場合、聞き慣れない用語(英語)に戸惑い分析過程で難しさを感じるがあった。これに対して両手法は、日本人が日本語の言語情報や文字記録を分析することを前提とするため、コーディングしたりカテゴリーを関係づけたりする過程で馴染みやすい印象を抱いた。

第三に、いずれも「構造」を扱う点や「実存性」を重視する点で優れていること。サトウ・春日・神崎(2019)は、「構造」-「過程」、「実存性」-「理念性」という2つの次元で特徴の異なる様々な質的データ分析法や質的研究法を分類する。その中でKJ法とSCATは、いずれも「過程」よりも「構造」を扱うのが得意であり、現象の背後にある本質的なことを理解する「理念性」よりも実際に存在することを理解する「実存性」に優れていると指摘する。うえの式質的分析法がKJ法の発展型であることを踏まえると、両手法もまた「構造」と「実存性」という共通の次元に位置付けることができる。

なお、本稿の執筆担当は、次の通りである。中坪史典(第1章、第2章第1節、第5章)、濱名潔(第2章第2節、第3章第3節)、淀澤真帆(第2章第3節、第4章第3節)、加藤望(第4章第1節、第2節)、田島美帆(第3章第1節、第2節)。

## 2. 対象と方法

### 2.1. 質的データ収集とリサーチ・クエスチョン

2018年6月7日、長崎市内にある私立A幼稚園の園長（60歳代、男性）（以下、A園長と表記）に研究協力を依頼しインタビューを実施した。A園長は、大学時代は保育・幼児教育とは異なる学問を学び、卒業後は名古屋市内の会社に勤務した。現在では、子どもの主体性を重視した園運営を展開する。そうしたA園長の経歴に注目し、「保育・幼児教育を学ぶことになかった彼が、なぜ子ども主体の幼稚園を運営するに至ったのか？」というリサーチ・クエスチョンを設定した。

### 2.2. SCATによる分析手順

大谷（2011, 2019）に基づき、次の手順で分析した。第一に、インタビューデータの言語記録を作成するとともに、それらを記したテキストをセグメント化（切片化）して「SCATの分析フォーム」に記入した。

第二に、分析者全員がテキストを十分に読み込み、<1> テキスト中の注目すべき語句を書くという手順に従い、それぞれのセグメントで重要と思われる部分を書き出した。

第三に、<2> テキスト中の語句の言い換えを書くという手順に従い、<1> に書き出したことを言い換えるような、テキストに無い語句を記入した。

第四に、<3> 左を説明するようなテキスト外の内容を書くという手順に従い、<2> に記入した語をそのデータの文脈で説明することのできる概念、語句、文字列を記入した。

第五に、<4> テーマ・構成概念を書くという手順に従い、<1> から<3> までに基づいて、それらを表すようなテーマ・構成概念を生成した。その結果、計32個のテーマ・構成概念が生成された。

第六に、以上を行いながら、<5> 疑問・課題を書くという手順に従い、フォローアップ・インタビューで確認したい点や、文献に当たって調べる必要がある点などを記入した。

第七に、<4> に記述したテーマ・構成概念を紡ぎ合わせてストーリー・ラインを作成するとともに、理論記述を行った。その後、さらに追求すべき点・課題を書き出した。

### 2.3. うえの式質的分析法による分析手順

上野・一宮・茶園（2017）、上野（2018）に基づき、次の手順で分析した。第一に、カード作成による情報のユニット化である。インタビュー時にアシスタ

トがいる場合、アシスタントがインタビュー者の発話内容を新聞の小見出しのようにまとめる情報のユニット化を行う（上野・一宮・茶園 2017 pp.44-45；上野 2018 p.170）が、今回は次の2段階で行った。まず、インタビューデータを分析者のうち2名がノンストップで聞き、聞き取った内容から重要とみなした語りをメモ書きしてテキスト化した。2名のうち両者及びどちらかがテキスト化したものを併せてA園長の発話内容を整理した。次に、テキスト化したデータを分析者全員で確認し、発話内容からカードを作成することで情報のユニット化を行った。その結果、計52枚のカードが作成された（表1）。

第二に、作成したカードをカテゴリー化し、各カテゴリー内容を示す「表札」を付してメタ情報を生成した。例えば、「保育職常識に対する疑問」は、他2枚のカードとともに「幼児教育に関する素人ゆえの疑問」というメタ情報となり、計18個のメタ情報が生成された。

第三に、メタ情報を「同じ」なら近くに、「違う」なら離して配置し（マッピング）、メタ情報が付されたカテゴリー間の関係性を因果関係（A → B）、対立関係（A ↔ B）、相関関係（A ⇄ B）の3種類の矢印でつないでチャート化した（図1）。

第四に、マッピングとチャート化に基づいてストーリーテリングを行った。なお、メタ情報の生成以降は、分析者全員で行った。

第五に、「何が語られたか」「何が語られなかったのか」を検討するとともに、時代背景や文化を踏まえた考察を加えた。

表1 情報のユニット化（一部）

テキスト化したインタビューデータ	作成されたカード
保育界の当たり前が不思議なものであった	保育職常識に対する疑問
そうだな、と思ったり、違うんじゃないかと思ったり	保育職常識に対する疑問探究
当たり前もひっきり納得いかないこともあった	保育職常識に対する疑問探究の結果、否定的感情の表出
納得いかないし気持ち悪いと思う	保育職常識に対する違和感解消欲求

## 3. SCATによる分析

### 3.1. 分析結果の概要

「SCATの分析フォーム」を用いた分析過程（一部）を表2に示す。また、テーマ・構成概念をすべて紡ぎ合わせて作成したストーリー・ライン、理論記述、さらに追求すべき点・課題を表3に示す（下線はテーマ・構成概念を示す）。なお、テーマ・構成概念は分析者が独自に生成した用語であり初見者には分かりにくい

ことから、以下では、上田・中坪・吉田・土谷 (2017) の表記にならない、テーマ・構成概念を括弧でくくり、それを分かりやすく言い換えた文章で記した。

SCAT による分析結果から、「保育・幼児教育を学ぶことのなかった A 園長が、なぜ子ども主体の幼稚園を運営するに至ったのか?」について、次の点が明らかになった。

#### (1) 保育者キャリアスタート時に醸成された保育実践観察眼

A 園長の保育者としてのキャリアは、知人が運営する大規模園において将来、家業である幼稚園の園長になることを前提とした幼稚園修行 (幼稚園運営前提の幼稚園体験) からスタートした。当時の A 園長は、保育士資格や幼稚園教諭免許状は有しておらず、保育実践の経験も皆無だったため、大規模園では担任や保育者としての働きが求められる構成員 (非戦力としての構成員) であり、保育者や子どもに積極的に関与しない保育参加 (傍観的保育参加) を行っていた。しかし、このような参加は、保育実践を第三者的に観察する関わり (エスノグラファー的関与) を可能にし、それによって保育行為の意図の発見 (保育行為の面白さ発見)、子どもならではの感じ方の発見 (子ども感性の面白さ発見)、保育環境構成の奥深さの発見 (保育環境の面白さ発見) がもたらされた。また、そのような関わり (エスノグラファー的関与) を続けることで、保育の世界では当たり前とされていることへの批判的な思考 (批判的思考) や、なぜこのような実践をするのだろうかと改めて本質を問い直す思考 (本質的思考) が促され、独自の観察眼醸成の起点 (エスノグラファー的関与による観察眼醸成の起点) に結びついた。保育者としてのキャリアスタート時に、このような A 園長独自の観察眼が醸成されたことは、後に子ども主体の保育を実践することに大きな影響を与えたと考えられる。

#### (2) 幼児教育の素人であるがゆえの強みと持ち味

保育実践を第三者的に観察する関わり (エスノグラファー的関与) の過程において、保育の常識に対する A 園長の批判的な思考 (批判的思考) や本質を問い直す思考 (本質的思考) が促されていくが、その理由として幼児教育の素人 (幼児教育門外漢) ゆえの好奇心や独自のアンテナで物事を捉える習慣を有していたことがあげられる。それは、幼児教育の素人 (幼児教育門外漢) ならではの強みでもあり、学生時代に保育・幼児教育を学んだ人とは異なる持ち味であると感じるようになり、素人であることを自ら肯定することにつながっていった。「素人感覚なのが、その良さとかね、それは今でも活かしていきたいなあとかね、

それは思うんですよね。当たり前だと思わないで、そういうところは、結局、ずっとその持ち続けていると言え言えるでしょうね」というテキストからも、自身のルーツが幼児教育の素人であること (ルーツとしての幼児教育門外漢) が現在の子ども主体の保育実践につながっていると考えられる。

### 3.2. SCAT による分析の特徴

#### (1) テキストに潜在する意味の吟味を促す4ステップ

分析過程において筆者らは、A 園長が担任や保育者としての働きが求められる構成員として保育参加する状況を周縁的参加と捉え、当初は「正統的周縁参加」というテーマ・構成概念を打ち出していた。しかし、吟味するうちに周縁的参加であることに違いないが、それは J・レイヴと E・ウェンガーが1990年代に提唱したものと意味が異なることに気づいた。「正統的周縁参加」とは、学習を「人が実践共同体に参加することによってその共同体の成員としてのアイデンティティを形成すること」とみなす (佐伯 2014)。A 園長の幼稚園修行は、あくまでも将来、家業である幼稚園の園長になることを前提としており (幼稚園運営前提の幼稚園体験)、保育者として周縁的な参加から十全的な参加へ移行するものではない。そのため A 園長の状況を的確に表現していないと判断した。その後、A 園長の保育参加について改めて吟味するために「SCAT の分析フォーム」を見直したところ、<3>に記入した「素人」「非戦力」というコードに含有する意味が抜け落ちていたことに気づいた。そのため最終的には、それらの意味を含有した傍観的保育参加というテーマ・構成概念を生成した。

このように SCAT では、テキストに潜在する意味を吟味することで、「正統的周縁参加」という既存の概念で説明するよりも適切なテーマ・構成概念を生み出すことが可能であり、ここに4つのステップを踏んで分析することの意味が見出される。大谷 (2019, p.273) によれば、4つのステップは、初学者が質的研究に取り組みやすいように数段階のスマールステップに分けることで言語的分析活動の支援を手続き中に内包したものであるが、手続きのみならず潜在的な意味を見出し「新しいことば」としてのテーマ・構成概念を生み出すためにも、4つのステップを踏むからこそ一つのテキストを多角的に検討できる。

#### (2) 分析過程の可視化がもたらす文脈重視によるテキストの意味の発見

「SCAT の分析フォーム」を用いることは、分析過程が常に可視化された状態をつくる。本分析で得られたテーマ・構成概念の中に、非戦力としての構成員が



トリー・ライン作成という手順が<4>に書かれているテーマ・構成概念の妥当性を最終的にチェックする機能を有することを実感できた(大谷2019 p.310)。このことからSCATの分析手順そのものが恣意的な分析を防ぐ仕組みを有しており、それによって、語り手のテキストや行動の意味を文脈重視で解釈するデータに根ざした分析が可能になると考えられる。

### 3.3. SCATによる分析の課題

#### (1) 着手しやすいからこそ求められる質的研究理解

既述したように筆者らは、テーマ・構成概念を生成する際に既存の概念を付したため、ストーリー・ラインを書くときにこれを説明することばを補う必要が生じた。筆者らの場合、SCATを用いた経験が過去にもあったことから、ことばの補足が多い時点でテーマ・構成概念が適切でない判断できた。SCATは、あくまでも一般性に当てはまらない具体性や個性性を深く描き出すものであり(大谷2019 p.347)、そのためには<4>で前後や全体の文脈を考慮してテーマ・構成概念を生成する必要がある。しかしながら、そのような意識を十分持たないままテキストのみに着目して検討したことがテーマ・構成概念を生成する際、既知の概念を安易に付した原因であった。

これはSCATの初学者によくあること(大谷2019 pp.345-347)である。SCATは、明示的で段階的な分析手続きを有し、初学者にも着手しやすいが(大谷2019 p.271)、適切なコードを案出し理論化するためには、質的研究に対する理解が不可欠である(大谷2019 p.274)。SCATを用いて適切に深く分析ができるかどうかは、質的研究に対する理解やデータ分析の際の考察力などの力量に左右される。今回、筆者らは過去の分析経験からストーリー・ライン作成途中のPitfalls(落とし穴)(大谷2019 p.345)に気づくことができたが、初学者がそれに気づくのは困難な場合も考えられる。そのため、初学者ほど質的研究を事前に学ぶ(大谷2019 p.274)こと、単に分析手順に従うだけでなく、大谷(2019 pp.336-348)が示すTips(コツ)とPitfalls(落とし穴)を適宜参照しながら行うことが求められる。

#### (2) テキストに潜在する意味の理解と表裏一体化する過剰解釈

SCATについて筆者らは、文脈を重視してテキストに潜在する意味を探り出し、テーマ・構成概念として生成し、それらを再文脈化することでできごとの「深層の意味の記述」(大谷2019 p.310)が可能になると捉えている。コーディングは従って、テキストの背後にあるインタビューの意図を探り出すことで可能

となることもあり、こうした分析を通して筆者らは、少しずつA園長の考え方を理解できるようになったと実感できた。すなわちA園長に対する理解が深まることでテキストに潜在する意味を探り出せるようになった。

一方で、それは「A園長ならこう考えるだろう」とテキストのコード化の際に必要な以上の意味を付与してしまい、過剰な解釈に陥る危険性もある。このようなことはSCATに限らず質的研究に共通の課題であるため、学術的な概念や理論とつぎ合わせながら解釈が妥当であるかを検討する必要がある(大谷2019 p.356)。このようにSCATでは、テキスト全体を読みながらその文脈に基づいてインタビューの考え方に対する理解が深まり、テキストに潜在する深層の意味の理解が可能になる反面、それによって過剰な解釈をもたらすことにも留意する必要がある。

## 4. うへの式質的分析法による分析

### 4.1. 分析結果の概要

分析の結果、得られたストーリーテリングの全文を枠内に記す。ゴシックはメタ情報、下線は情報のユニット化において作成されたカードを示す。

A園長は、幼児教育の専門性尊重をしつつ幼児教育非専門的視点の尊重により、子ども主体の幼稚園運営を行っている。

A園長は、将来の目標が見つからず自由を謳歌した学生時代を送っていたが、それはA園長にとって誇れない学生時代であり、漠然とした将来への不安を抱えていた。しかし、自分の将来は自分で決めたいという思いがあった。一方で、A園長は、経済的・社会的地位に恵まれた出自であり、親の提案にのり幼稚園開園を目指すことになる。それはつまり恵まれた社会的地位の受け入れであり、渡りに船のモロトリアム脱却でもあった。

幼稚園開園にあたって、幼児教育の専門性尊重をしているA園長には、幼児教育に関する専門知識の欠如が課題であり、縁あつての保育実務経験を積むことになった。その縁あつての保育実務経験を積む過程において、幼児教育に関する素人ゆへの興味関心が芽生え、幼児教育に関する素人ゆへの疑問が生じた。そこから幼児教育の常識に対する疑問探究をはじめ、現在に至るまで幼児教育の常識に対する疑問探究姿勢の保持に努めている。その幼児教育の常識に対する疑問探究姿勢の保持は、幼児教育非専門的視点の尊重でもあり、A園長自身のモロトリアム経験の自己肯定、つまりモロトリアムの重要性を意味している。

うえの式質的分析法による分析結果から、「保育・幼児教育を学ぶことのなかった A 園長が、なぜ子ども主体の幼稚園を運営するに至ったのか?」について、次の点が明らかになった。

(1) 主体として生きる楽しさの経験

A 園長は、幼児教育を学んだ人と自分との大きな差異の確信を抱き、幼児教育の専門性を尊重している。だからこそ将来の目標が見つからず自由を謳歌した学生時代に、自身が幼児教育を学ばず学業専念ではない学生時代を送っていたことは、園長である現在の自分からは誇ることのできない学生時代であった。しかし最終的には、幼児教育・保育に関する無知・無経験であることの自己肯定から専門的知識のない私による視点も保育には必要であると幼児教育非専門的視点の尊重へと至っている。

つまり、自分自身が学業に翻弄されることなく学生時代を主体として生き、自由を謳歌した青春時代をモラトリウム時代の自己肯定としてポジティブな経験と捉えていることで、子どもたちにも子ども主体で生きることの大切さを理解しているといえる。

(2) 非専門的ゆえの疑う姿勢

幼稚園開園にあたって A 園長には、幼児教育に関する専門知識の欠如が課題であり、知人が運営する園において縁あつての保育実務経験を積むこととなった。この経験を積む過程において、保育者の言動に関する興味や子どもを理解したいという意欲といった幼

児教育に関する素人ゆえの興味関心が芽生え、保育職常識に対する疑問のように幼児教育に関する素人ゆえの疑問が生じた。従って、幼児教育の常識に対する疑問探究をはじめ、現在に至るまで幼児教育の常識に対する疑問探究姿勢の保持に努めている。

幼児教育・保育に関わる職業では、常に自己の保育を振り返る必要があり、それにより社会的変化に対応した保育を行うことが求められる（中坪・香曾我部・後藤・上田, 2011）。A 園長のように保育者の言動に関する興味や保育職常識に対する疑問のような既存の幼児教育方法に対して疑問を持ち、その姿勢の保持に努めることは、年々変わりゆく幼児教育の理念を学び直すことにつながっていると思われる。結果として、A 園長は昨今の流れに順応するような子ども主体の幼児教育を実施するに至っている。

(3) 理想の保育が語られないからこそ持ち合わせる主体的保育の実現

A 園長は、幼児教育の専門性を尊重しつつ、自身の幼児教育非専門的視点の尊重もしている。しかし、保育者養成課程を卒業し、専門知識を積んだ保育者が有しているであろう保育への理想が A 園長のテキストには語られていない。この理想の保育が語られないことから、A 園長には既存の理想とする保育がなかったがために、幼稚園教育要領の明示する子ども主体の幼児教育に対する順応も可能であったと考えられる。

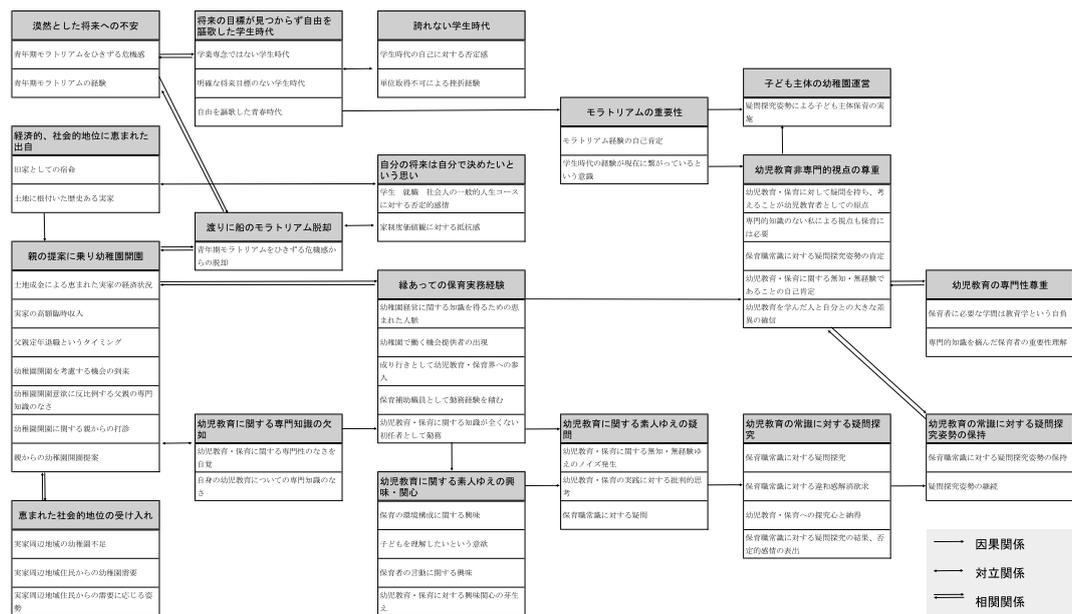


図 1 うえの式質的分析法のチャート図

## 4.2. うえの式質的分析法による分析の特徴

### (1) 全体像の可視化と限定された論理関係によってスムーズに行われる物語化

うえの式質的分析法では、マッピングを通してメタ情報を「同じ」なら近くに、「違う」なら離して配置することから（上野 2018 p.201）、分析結果について分析者は、全体像を曼荼羅図（上野 2018 p.205）のように視覚的に捉えることができる。また、マッピングに基づいてすべてのメタ情報（上野 2018 p.199）を論理的関係でつなぐチャート化は、因果関係（ $A \rightarrow B$ ）、対立関係（ $A \leftrightarrow B$ ）、相関関係（ $A \rightleftharpoons B$ ）のみで捉える（上野 2018 p.202）というシンプルな作業である。こうしてほぼすべてのメタ情報を論理的関係でつないだ後、因果関係なら「だから」「したがって」、それをさかのぼるなら「というのは」「なぜなら」、対立関係なら「しかし」「とはいえ」、相関関係なら「と同時に」「とともに」という接続詞を用いて物語化するだけであり（上野 2018 p.208）、分析者は容易にストーリーテリング（上野 2018 p.204）を行うことができる。また、ストーリーテリングにはルールがあり、曼荼羅図を見て情報ユニット（一次情報の集合）（上野 2018 p.204-206）が集中しているところから始めるか、矢印の出入りによる論理関係を追うかのどちらかである（上野 2018 pp.206-209）。こうしたルールに即すことで分析者には、スムーズな物語化が可能になり、ストーリーテリングの山場も情報ユニット数の多さで自ずと可視化される。

### (2) コツ (Tips) 不要の手順マニュアル

うえの式質的分析法の場合、情報をユニット化したカード作成ができれば、後は手順に則って分析するだけで結果が明らかとなる。また、カード作成においても、テキストにある文言の使用が可能であり、データに抜けがあっても分析できる（上野 2018 p.233）。ユニット化以降は手順通りを行うため、分析者の恣意性を排することができる。従って上野（2018 p.233）が語るように、有無を言わさぬやり方で、ここまでは確実に言えるという結果を出せることが強みであり、どこまでも初学者にやさしい手法である。

しかし、カード作成の作業には、語彙力が必要であり、さらには研究目的に関する学識的知識、時代背景、社会文化などに関する一定の知識があるとカード作成がより容易になる。本研究では、研究協力者が60歳代男性であり、日本の幼稚園の園長であることから、分析者にとっては、幼児教育の中でも幼稚園経営（運営）に関する知識や、A 園長が学生時代の日本の時代背景や社会文化、長崎や名古屋など地域に関する情報がある程度必要であった。

### (3) データに語るさせる

上野（2018 p.234）によれば、うえの式質的分析法は、データをそれが置かれた構造的文脈のもとで読み解くことを通じて、解釈者の恣意性を排する確実で実践的な方法である。実際、分析結果を出してから考察に入るという手順が示されており、ストーリーテリングは、チャート化された3通りの矢印に即して忠実にを行うことから、分析結果に対する分析者の恣意性を排し、「データに語るさせる」ことが可能となる。

本研究では、**幼児教育非専門的知識の尊重**に関するカードが5枚あり、7つの矢印が出入りする。このことから、A 園長にとって**幼児教育非専門的知識の尊重**が重要な意味を有することがデータから浮かび上がる。

## 4.3. うえの式質的分析法による分析の課題

### (1) 逐語表記を行わないことによる情報の漏れ

うえの式質的分析法の特徴として、逐語表記を行わず音声データから直接分析することが挙げられる（上野・一宮・茶園 2017 pp.43-48；上野 2018 pp.170-171）。質的データ分析において逐語録の作成は、分析前に欠かせない手順である（シルヴァーマン 2006；クヴァール 2016）にもかかわらず、うえの式質的分析法にはこの作業がないためテーマが省けて省エネになる（上野・一宮・茶園 2017 p.31；上野 2018 p.171）。本研究においても、音声データを使用したことでインタビューによる話の繰り返しをその都度捉えてカード化し、分析に活かすことができた。A 園長が繰り返し述べた「学生時代に何もしていない」という主旨の内容は、毎回カード化され、そのままマッピングにも使用された。

一方、逐語表記を行わないことで情報の漏れが生じることが危惧され、このことは上野・一宮・茶園（2017 pp.44-46）でも指摘されている。情報の記録を逐語表記して分析する場合、分析者は、文字情報として一言一句を切り取って分析することができるが、音声データをもとに分析する場合、重要な情報を聞き逃している可能性が生じる。本研究においても、音声データの重要語句を2名で抽出したものの、重要な情報が抜け落ちていないとは言い切れない。

この点については、逐語録を使用する場合でも妥当性や信頼性に一定の課題が残されることから（クヴァール2016）、必ずしも逐語表記すれば情報の漏れが改善されるわけではなく、逐語表記する場合としない場合のメリットとデメリットを理解し、その上で研究に適した方法を採用することが重要であろう。

## (2) 無意識に入り込みかねない恣意性への留意

うえの式質的分析法では、ストーリーテリングを終えた段階で、初めて分析者の考察がスタートする（上野2018 pp.212-213）。ストーリーテリングから何が語られ、何が語られなかったかを検討する（上野・一宮・茶園 2017 p.60；上野 2018 pp.212-213）。そして、さらに問いを立て、「時代、世代、年齢、性別、学歴、職業等々その関係を考察」（上野2018 pp.212-213）する。既述したように、うえの式質的分析法は、手順が明確でありストーリーテリングまでは手順に則って分析を進めるため、分析者による恣意的な情報加工をしていないと主張される（上野2018 pp.212-213）。

しかし、最初の音声データによる情報のユニット化の際の聞き漏らし、分析者の耳に残る情報、マッピング、チャート化の際の矢印の引き直しなど、論理的な必然性よりも分析者の恣意性が勝ることも否定できない。うえの式質的分析法は、考察までの手順が明確であるため、分析者の意図を比較的含まずに分析することが可能であるものの、分析過程においては、恣意的な判断が無意識に入り込みかねないことは留意する必要がある。

## (3) 言語外情報を捨象することの大切さと難しさ

うえの式質的分析法が分析するのは、「コンテンツ（メッセージの内容）であって、語り方ではない」（上野・一宮・茶園 2017 p.42）と言われるように、分析においては、インタビューが語った内容のみを対象としなければならない。語り口調や間、沈黙やためらいなど、言語外情報の検討は、本手法では適さないのである（上野・一宮・茶園2017p.47；上野 2018 p.170）。

とは言え、本研究においても、音声データをテキスト化したり聞き直したりする際、A園長の発話の間や言いよどみなど気になる点が幾つかあった。本研究では、その都度分析者間で議論し、発話内容に焦点化しよう努めた。このようにうえの式質的分析法では、音声データから分析を始めるため、ともすると言語外情報に耳が傾くことも少なくない。この点に留意し、言語外情報を捨象する勇気が求められる。

## 5. 総合考察

### 5.1. 脱文脈化と再文脈化における共通点と相違点

SCAT とうえの式質的分析法は、いずれも脱文脈化と再文脈化の手続きを伴う点で共通しており、これは KJ 法を除く多くの質的データ分析法には見られない特徴であるという（大谷 2019 p.317）。また、再文脈化の過程（SCAT ではストーリー・ラインの作成、うえの式質的分析法ではストーリーテリング）におい

ても、案出されたすべてのコード（SCAT ではテーマ・構成概念、うえの式質的分析法ではメタ情報）を必ず一回以上用いる点も共通する（大谷 2019 p.308；上野 2018 p.208）。これらは SCAT、うえの式質的分析法、そして KJ 法のみに見られる貴重な共通点であろう。

その上で SCAT は、ことばを単位に 4 ステップで分析することで脱文脈化を行い、生成されたテーマ・構成概念を紡いでストーリー・ラインを作成することで、テキストに潜在する深層の意味にたどり着くことができる（大谷2019 p.310）。他方、うえの式質的分析法は、メタ情報を配置するマッピングとそれぞれのメタ情報を論理的関係でつなぐチャート化を通してストーリーテリングを行うことで、情報の集合のあいだにある当事者も気づかないような隠れた「構造」を発見することができる（上野 2018 p.206）。

つまり SCAT では、横方向に段階的に脱文脈化を繰り返し、最終段階（4 段階）で生成されたテーマ・構成概念の関係性を検討しながら紡ぎあわせて再構造化することで再文脈化を行う（大谷 2019 p.317）。一方、うえの式質的分析法では、情報のユニット化とカテゴリー化によるメタ情報の生成を通して時間変数を排した脱文脈化を行い、生成されたメタ情報をマッピングしチャート化することで分析をいったん終了する（上野 2018 p.204）。再文脈化は、情報ユニットが集中しているところを手がかりに、時間変数を導入して物語を編むという作業となる（上野 2018 pp.206-207）。

セグメント化されたテキストを横方向に段階的に脱文脈化する点に SCAT の特徴があり、脱文脈化されたメタ情報を曼荼羅図のように図解化し、再文脈化の起点が情報ユニット数の多さで視覚的に示される点にうえの式質的分析法の特徴がある。

### 5.2. 対照的な魅力を有する SCAT とうえの式質的分析法

SCAT の場合、分析者には質的研究についての十分な理解が求められ、幾多の経験を経て Tips（コツ）（大谷2019 p.336）を会得し、Pitfalls（落とし穴）（大谷2019 p.345）に気づくことができる。コーディングにあたっては、テキストを何度も十分に読み込むことが大切であり、テキストをよく読まないでいきなりコーディングを始めることは許されない（大谷2019 p.281）。つまり SCAT は、質的研究を十分に学んだ者が時間と労力をかけて行うのであり、質的研究に対する理解がないまま安易に用いると「質の低い」質的データ分析となることも少なくない。実際、「無理なくおかしな方向に導かれた」論文が数多く発表されていることが指摘されている（大谷 2019 p.274）。その

一方で、筆者らの経験によれば、質的研究の意味を理解し、テキストを十分に読み込み、時間と労力をかけて分析することで、テキストに潜在する深層の意味にたどり着いたときの知的興奮は計り知れない。この知的興奮こそ、SCATの最大の魅力であると思われる。

他方、うえの式質的分析法の場合、SCATとは対照的に、コスパのよさ(上野 2018 p.233)、効率のよさ(上野 2018 p.171)、省エネ(上野 2018 pp.170-171)が標榜されており、データの逐語表記も行わなければ、テキストを何度も十分に読み込む必要もない。マッピングとチャート化は、筆者らも驚くほど容易に行うことができ、Tips(コツ)を会得する必要もなければ、Pitfalls(落とし穴)に陥る不安もない。本研究においても、同じインタビューデータを分析したにもかかわらず、所用時間や要する労力は、SCATよりもはるかに少なかった。それにもかかわらず、初学者が陥りがちな「テキストから美味しいところだけをつまみ食いし、臨場感溢れる文章にしてお茶を濁す」(上野 2018 p.150)「結果的に自分の言いたいことをデータに代弁させる」(上野 2018 p.234) ことには決してならず、「質的データを徹底的に帰納分析し、データそのものに語らせる」(上野 2018 p.150) ことができる。この誰でも簡単に着手できる点こそ、うえの式質的分析法の最大の魅力であると思われる。但し、質的研究に対する理解が浅くとも、一定の質的分析が確実に行える一方で、結果にたどり着いたときの知的興奮はSCATほど大きくない。

また、SCATもうえの式質的分析法も、パソコン上での分析と紙と鉛筆などアナログでの分析の両方が可能である。とは言え、SCATは、パソコンと表計算ソフトの使用が推奨されるのに対して(大谷 2019 p.278)、うえの式質的分析法は、全紙大の模造紙とカードを用いた手作業の方が、データ処理のプロセスが分かりやすく達成感も味わえるとされる(上野 2018 p.194)。この点にも、両者の対照的な魅力を見ることができる。

### 5.3. 本研究の限界

本研究では、A幼稚園長1名のインタビューデータを分析対象としたため、うえの式質的分析法の醍醐味(上野 2018 p.214)であるマトリックス分析を行っていない。この点は、本研究の限界である。

## 【引用文献】

- Glaser, G. Barney & Strauss, L. Anselm (1967) *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*. Chicago: Aldine Publishing Company. 後藤隆・大出春江・水野節夫訳 (1996) 『データ対話型理論の発見：調査からいかに理論をうみだすか』, 新曜社
- 川喜田二郎 (1967) 『発想法』, 中央公論社
- クヴァール・スタイナー著 能智正博・徳田治子訳 (2016) SAGE 質的研究キット2, 『質的研究のための「インター・ビュー」』, 新曜社, 141-183頁
- 中坪史典・香曾我部琢・後藤範子・上田敏文 (2011) 「幼児理解から出発する保育実践の意義と課題－幼児理解・保育計画(デザイン)・実践・省察の循環モデルの提案－」, 『子ども社会研究』, 第17号, 83-94頁
- 中坪史典 (2017) 「保育実践と質的研究：その「質」を問う」, 『保育学研究』, 第55巻, 第3号, 357-358頁
- 大谷尚 (2008) 「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案－着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き」, 『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』, 第54巻, 第2号, 27-44頁
- 大谷尚 (2011) 「SCAT: Steps for Coding and Theorization－明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法－」, 『感性工学』, 第10巻, 第3号, 155-160頁
- 大谷尚 (2019) 『質的研究の考え方－研究方法論からSCATによる分析まで－』, 名古屋大学出版会
- 佐伯胖 (2014) 「そもそも「学ぶ」とはどういうことか：正統的周辺参加論の前と後」, 『組織科学』, 第48巻, 第2号, 38-49頁
- 戈木クレイグヒル滋子 (2006) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ－理論を生みだすまで－』, 新曜社
- 境愛一郎・中西さやか・中坪史典 (2012) 「子どもの経験を質的に描き出す試み－M-GTA と TEM の比較－」, 『広島大学大学院教育学研究科紀要第三部(教育人間科学関連領域)』, 第61号, 197-206頁
- サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実 (2019) 『質的研究法マッピング－特徴をつかみ、活用するために－』, 新曜社
- シルヴァーマン・デイヴィッド (2006) 「第8章 発話とテキストを分析する」ノーマン・K・デンジンイヴォンナ・S・リンカン編 平山満義監訳・大谷尚・伊藤勇編訳 『質的研究ハンドブック3巻：質的研究資料の収集と解釈』, 北大路書房
- 上田敏文・中坪史典・吉田貴子・土谷香菜子 (2017) 「実践知としての保育者の「見守る」行為を解説する試み－当事者の語りに着目して－」, 『子ども学』, 第5号, 萌文書林, 223-239頁,
- 上野千鶴子監修・一宮茂子・茶園敏美編 (2017) 「語りの分析(すぐに使える)うえの式質的分析法の実践」, 『生存学研究センター報告』, 27, 立命館大学生存学研究センター
- 上野千鶴子 (2018) 『情報生産者になる』, ちくま新書